

アフリカの稲作 < 第 3 回 >

ウガンダの陸稲栽培

ウガンダの稲作は、主に東部の低湿地帯における水稲作であり、100 年ほどの歴史があるといわれている。現在、天水・灌漑を合わせて70,000haの水田がある。一方、陸稲栽培の歴史は新しく、作付けもごく限られたものであったが、ネリカ品種の導入とともに、急速に栽培面積が増えており、2002 年の 1,500ha から 2008 年には 40,000ha に達したといわれている。高まるコメ需要を満たすためには灌漑水田の開発が有効であるが、建設コストのほかにも環境保護の観点から湿地の開発に対して厳しい規制があるなど課題が多い。そうした中で、環境に配慮した小規模な灌漑水田の開発とともに、陸稲栽培の普及が果たす役割が大きいと期待されている。陸稲栽培は多くの農家にとって、新しい技術であるが、一部の湿地でしか栽培できないと考えられていたコメを畑地でも生産できるということで、農家からも注目されている。昨年、ウガンダ「ネリカ米振興計画」短期専門家業務に従事し、陸稲農家の栽培技術の現状を調査する機会を得た。今回は、その知見をもとに、陸稲の栽培技術をウガンダの農家がどのように受け入れているのかを紹介する。

本調査は、カンパラ近郊に所在する国立作物資源研究所周辺の農家を対象に行った。調査対象地は緩やかな丘陵地であり、多くの農家は丘陵の斜面ではなく、谷の低い位置にある比較的平坦な土地に陸稲を栽培していた。そうした場所は、地下水位が高く、有機物が蓄積し肥沃度も高いことが期待されるため、陸稲栽培に適している。プロジェクトのカウンターパートなどの指導を受けた先進農家が陸稲を栽培しているのを見て興味を持ち、種子をその農家から購入して栽培を始めた農家も多く、1 年未満の経験しかない農家がほとんどであった。品種としては、NERICA4 を栽培している農家がほとんどであった。栽培面積は 0.1ha 程度の小規模な栽培が多かったが、最も大きい農家では 1.7ha を栽培していた。



写真1. 丘陵地の谷間に位置する農家の陸稲圃場

陸稲の在来栽培技術は存在しないと言えるため、栽培の基本的知識も先進農家を通じて得ており、プロジェクトの栽培指針に沿った栽培の実践が見られた。陸稲栽培では、除草が収量向上の大きなポイントであり、この除草作業を容易にするために重要なのが条播き栽培であるが、調査した農家すべてが条播をしていただけでなく、周辺農家の圃場でも条播している状況が観察できた。条間は 25cm から 40cm 程度であり、プロジェクトの推奨する 30cm に近かった。除草作業もすべての農家が、栽培期間中に 3 回実施するということであり、これもプロジェクトの栽培指針に沿った実践であった。

このようにプロジェクトが推奨している技術がよく浸透している一方で、既存作物の技術を陸稲に適用している例も見られた。収穫のための鎌が普及しておらず、面積の大きい農家では、鉋で稲刈りをし、面積の小さい農家では穂刈りで収穫するのが一般的であった。脱穀は、ほとんどが穂を棒などで叩く方法であった。この方法で脱穀するには、穂刈りした収穫物は邪魔な藁がないため便利であるとのことであった。また、調査した地域はもともと稲作地帯ではないため精米所が存在しない。精米するためには、籾を近隣の町の精米所に持って行く必要があるが、自家用にはトウモロコシの製粉に用いる臼と杵を用いて脱穀する農家もいた。その他にも野菜との二毛作や陸稲とトウモロコシの間作など、稲単作がほとんどの水稲とは違う栽培体系を見ることができた。さらに、栽培技術とは直接関係ないが、藁を圃場近くの小屋を葺くのに用いている光景も見ることができ、陸稲がこの地域住民の生活文化の中に浸透していることを感じた。

しかしながら、ウガンダの陸稲作は始まったばかりであり、農家による栽培技術の工夫が加えられつつも、今後、陸稲栽培定着のためには、鎌や脱穀機による栽培技術の効率化や、精米所の普及などによるマーケットへのアクセス改善が重要である。また、病害虫の発生など面積の拡大に伴い新たに発生することが懸念される問題にも注意を払う必要があるであろう。



写真2. 杵と臼 写真3. 稲藁で葺かれた小屋